

今季の逸品

大野延太郎（雲外）が描いた 「弥生式土器と瓢箪」

今回紹介するのは、大野延太郎（1863 - 1938、雅号は雲外）が1920（大正9）年に描いた、弥生式土器（弥生土器）と瓢箪の絵画です。この絵画は、最近の資料整理によって確認されました。

大野は、鳥居龍蔵と同様、東京帝国大学人類学教室に所属した人物です。彼は、多くの記録画を残しただけでなく、自ら遺跡を調査し、その成果を東京人類学会などで発表した人類学の研究者でもありました。

左の絵画は、大野が1920年10月13日に、人類学教室で「弥生式土器と瓢箪」という題名により描いたものです。彼は同年12月11日に開かれた東京人類学会例会で、「弥生式土器と原始物に就て」という報告を行っており、その際にこの絵を参考資料として使ったと思われます。また、例会が終了した後、この絵をめぐる籤引きが行われた結果、鳥居が当選し、この絵が鳥居のもとに残されることとなりました。

以上の経緯を持つこの絵画は、大野が画家としてのみならず、研究者としても活動したことや、大野と鳥居の関係の一端を伝える貴重な資料です。（下田順一）



企画展

日本人類学の パイオニア 坪井正五郎

徳島出身の人類学者・鳥居龍蔵（1870－1953）は傑出した研究者でしたが、その才能を見出し育てたのは、恩師 坪井正五郎（1863－1913）でした。

坪井は、大学生だった1884（明治17）年に、仲間とともに人類学会（現在の日本人類学会）を設立し、1893年には東京帝国大学人類学講座の初代教授に就任するなど、人類学の確立と発展に努めたことから、「日本人類学のパイオニア」といえます。彼は各地で遺跡や習俗などの調査や研究を行ったほか、市民向けの講演にも精力的に取り組みました。また、坪井のもとには、多種多様な経歴を持つ人々が集い、鳥居のほかに、画家であり考古学者でもあった大野延太郎（1863－1938）ら後進が育っていきました。

この企画展では、坪井による人類学研究の様相や、坪井の下で学んだ鳥居と大野の業績を紹介することによって、日本人類学の黎明を顧みることとします。

会 期 2026年10月17日（土）～11月23日（月・祝）

休館日 月曜日（ただし、11月23日〔月・祝〕は開館）

会 場 徳島県立博物館1階 企画展示室

観覧料 一般200円、高校・大学生100円、小・中学生50円

※各種減免あり。

主 催 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館、徳島県立博物館

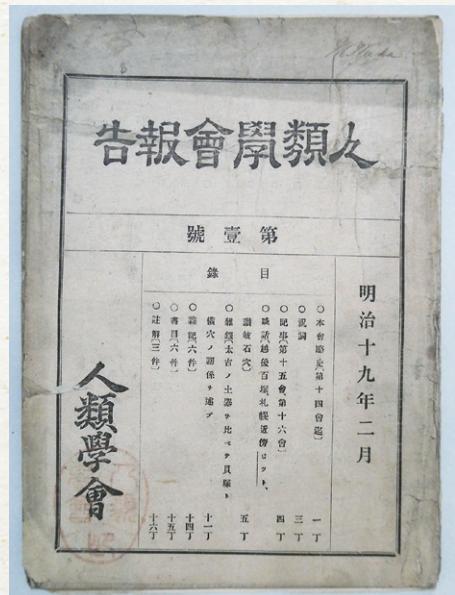


坪井正五郎肖像写真
東京大学総合研究博物館蔵



東京帝国大学理科大学人類学教室前の集合写真（1906年）

後列右から坪井正五郎、鳥居龍蔵、大野延太郎。



『人類学会報告』第1号（1886年）

日本ではじめて発行された人類学の学術雑誌。

人類学会は坪井らが設立した学会。

展示構成

プロローグ 坪井正五郎と鳥居龍蔵の出会い
徳島における坪井と鳥居の出会いを紹介します。

第1章 坪井正五郎、日本で人類学を始める
学生だった坪井が日本で人類学を始め、ヨーロッパに留学した頃までの様子を紹介します。

第2章 坪井正五郎、人材を育てる
—鳥居龍蔵と大野延太郎—

坪井の下で学んだ鳥居と大野を取り上げ、それぞれの業績を紹介します。

第3章 坪井正五郎、市民に人類学を広める
東京大学教授の坪井が、人類学を市民に広めるために行った活動を紹介しします。

エピローグ 坪井正五郎がのこしたもの
坪井が急逝した後の人類学教室や日本人類学界について紹介します。

関連行事

記念講演会(第1回)

「坪井正五郎の人類学研究

—一人種論を中心に—」

講師 平田 健氏(東京都教育委員会学芸員)

日時 10月25日(日) 13:30~15:00

会場 文化の森 イベントホール

定員 100名 ※申込不要、先着順、参加無料

記念講演会(第2回)

「日本人類学における画工・大野延太郎(雲外)の役割—坪井正五郎や鳥居龍蔵との交流を背景として—」

講師 藏田愛子氏(大阪大学大学院人文学研究科助教)

日時 11月15日(日) 13:30~15:00

会場 文化の森 イベントホール

定員 100名 ※申込不要、先着順、参加無料

展示解説

日時 10月18日(日)、11月3日(火・祝)、
11月22日(日)

いずれも13:30~14:30

会場 徳島県立博物館 企画展示室

※申込不要、観覧料が必要



鳥居龍蔵・大野延太郎編『人種地図』(1902年)

個人蔵。坪井正五郎の校閲のもと、鳥居龍蔵と大野延太郎が作製した地図。



世界人類風俗人形

東京大学総合研究博物館蔵

晩年の鳥居龍蔵と中国の人類学界

当館の収蔵資料の中には、著者もしくはその関係者による献辞^{けんじ}を伴う書籍類があり、そこから鳥居龍蔵の人間関係を知ることができます。ここでは、そうした資料を手がかりにして、晩年の鳥居が中国の人類学界と交流した様子をうかがってみましょう。

館蔵資料から、晩年の鳥居と交流したことが判明する人類学者の一人に、林耀華^{りんよう か}（1910 - 2000）がいます。林耀華は福建省^{ふっけん}の出身であり、北京にあった燕京大学^{えんきよう}や、アメリカのハーバード大学で学びました。彼は中国における宗族^{そうぞく}（血縁・祖先を同じくする父系の同族集団）などについて研究し、多くの業績を残しています。また、1946年から1951年まで、鳥居と林は燕京大学における同僚でもありました。

そんな林耀華は、1947年5月に出版した『涼山夷家』^{りやうざん い か}（図1）を鳥居に贈りました。同書は、林が1943年7月から同年9月にかけて、四川省南部で彝族を調査した成果として発表したものです。その内容は、彝族の社会組織に関する分析を中心とし、親族組織に関する単語リストや調査時の紀行文を付録とするものでした。林が鳥居に『涼山夷家』を贈ったのは、鳥居が20世紀の初めに、四川省南部で彝族を調査したことを知っていたためだと思われます。鳥居は1902（明治35）年から翌年にかけて、四川省を含む中国西南部で民族調査を行い、その成果を『苗族調査報告』などの著作にまとめました。そうした鳥居の調査成果は、1920年代後半以降に中国語に翻訳され、中国の人類学界に受容されていたのです。

鳥居は1948年11月に発行された『燕京社会科学』第1巻で、『涼山夷家』に関する書評（図2）を発表し、彝族社会について詳細に分析した同書を高く評価しました。鳥居の日記には、1948年1月に『涼山夷家』の書評を準備していたことが記録されています（図3）。鳥居が書評を書くことになった経緯は不明ですが、彝族を調査した経験があることから、依頼されたのだと思われます。（坂東 泰）

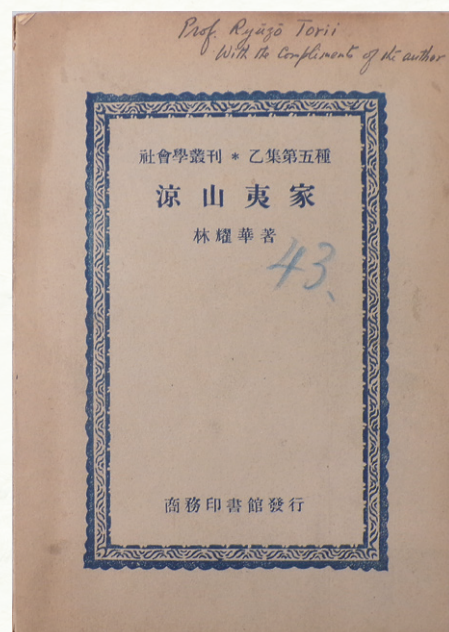


図1 林耀華著『涼山夷家』
表紙に林耀華の献辞を確認できます。

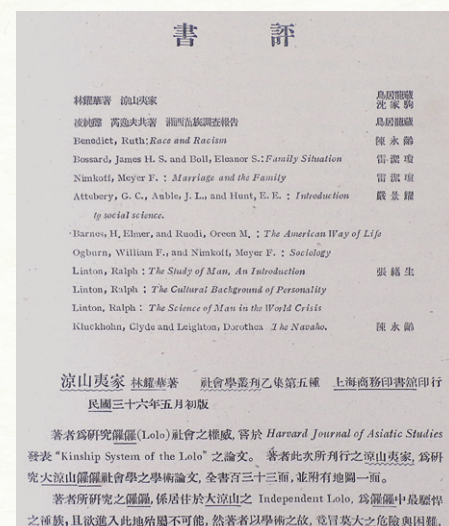


図2 鳥居龍蔵が発表した書評

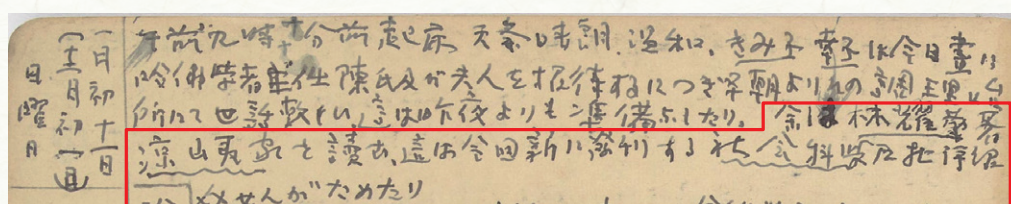


図3 鳥居龍蔵日記（1948年）

1月11日に、書評の執筆に向けて『涼山夷家』を読んでいたことが記録されています（赤枠部分）。

鳥居龍蔵が見た大森荒神社貝塚

鳥居龍蔵は1922（大正11）年3月から5月にかけて、徳島県内で活発に視察・調査・講演を行いました。本紙9号で紹介した勝瑞城跡^{しょうずいじょうあと}は、その際に調査された遺跡の1つです。今回は、当時の鳥居が勝瑞城跡に先立って調査した貝塚について、見ていきたいと思います。

同年4月1日付の『徳島毎日新聞』は、鳥居が堀江村^{いけのたに}の池谷^{おおあさ}（現在の鳴門市大麻町池谷）から板東町（現在の同市大麻町板東）にかけて、古墳・貝塚を踏査する予定であると報じています。鳥居が同日に記した日記でも、同様の旅程が記録されています。これらの記録を、雑誌『阿波名勝』第2号に掲載された「阿波国貝塚概説」や、雑録「鳥居博士の踏査^{おおもり}」と照合すると、鳥居はこの日に、堀江村字大森（現在の同市大麻町姫田大森）の荒神社貝塚^{こう}、同村字東山谷貝塚、同村字山田貝塚を調査したことが分かります。堀江村字大森の荒神社貝塚は、現在の葛城神社^{かつらぎ}の北側、飛び地の社である荒神社の跡地周辺にあった貝塚と推定されます。

葛城神社は、県道12号鳴門池田線を鳴門市街地から車で5分ほど西へ行ったところ、JR鳴門線の立道^{たつみち}駅の西側にあります。この葛城神社から北側へ50mほど離れた場所に大森荒神社があったとされます。

大森荒神社跡地周辺では、1988（昭和63）年に大森荒神社貝塚の発掘調査が文化の森建設事務局によって行われ、調査状況に関する現地説明会も実施されました。その調査記録によれば、同貝塚は鎌倉時代の貝塚であったと考えられており、須恵器^{すえき}、土師^{はじ}質土器^{しつどき}、瓦器^{がき}、獣骨^{じゅうこつ}、獣歯^{じゅうし}、貝（シジミ、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミ、カキ、カワアイ）が出土しています。この発掘調査の中心となった天羽利夫氏は、後に徳島県立博物館の館長を務め、現在は「鳥居龍蔵を語る会」の代表として、鳥居龍蔵研究を推進しています。現代の大森荒神社貝塚の発掘は、不思議な縁で、大正、昭和、平成、令和へとつながっているように感じられます。

現在の大森荒神社跡地の背後には、四国横断自動車道が通っており、鳥居が約100年前に見たであろう光景とは大きく異なるものとなっています。もしも大森荒神社跡地を訪れる機会がありましたら、かつての鳥居の調査活動に思いを巡らせていただければと思います。

（近藤 玲）

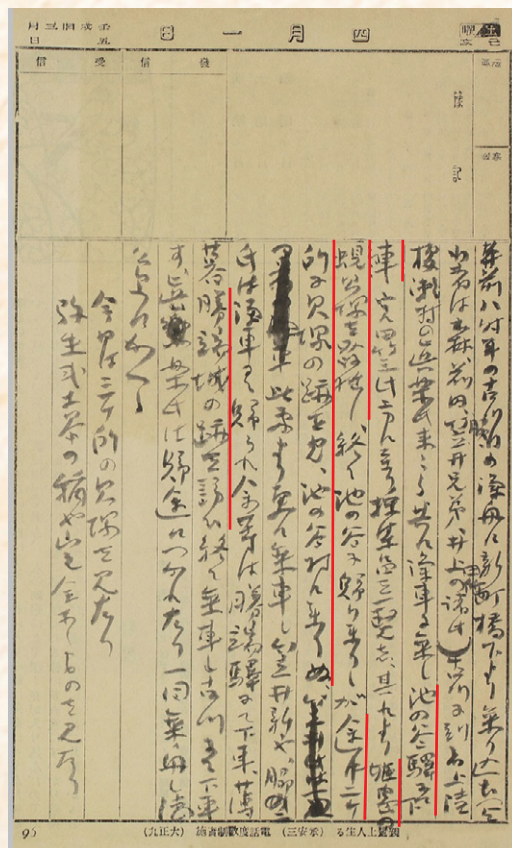


図1 鳥居龍蔵日記（1922年）

4月1日の記事として、池谷や板東における調査の旅程が記録されています（傍線部分）。



図2 大森荒神社跡地

第18回 日台原住民族研究フォーラム参加記

当館は2022年9月に、国立台湾史前文化博物館と連携協定を締結し、相互交流と共同学術調査を行っています。その一環として、筆者を含む当館職員2名が2025年8月に訪台し、第18回日台原住民族研究フォーラム（8月27日開催）に参加しました（図1）。

日台原住民族研究フォーラムは、台湾の国立政治大学が2008年から毎年主催している国際学会であり、日本と台湾の研究者が原住民族に関する研究成果を発表しています（図2）。筆者らが参加した第18回の同フォーラムは、下記のセッションで構成されていました。①民族政策、②教材編纂と民族言語教育、③台湾と沖縄：原住民族を通じて理解する、④鳥居龍蔵研究（1）、⑤鳥居龍蔵研究（2）。

上記の各セッションは同一会場内で連続して行われ、台湾原住民族や鳥居龍蔵に関するテーマのほか、北海道におけるアイヌ民族関連の施策、沖縄・九州を中心とする日本語方言の特徴とその広がり、台湾・フィリピン原住民の言語研究とその意義といった幅広いテーマについて、議論が交わされました。

筆者は⑤のセッションにおいて、当館の概要と、当館で行っている鳥居龍蔵の台湾フィールドノートによって判明した鳥居の台湾調査の実態について報告しました（図3）。他の報告や、報告後の質疑応答から、鳥居のフィールドノートには、現在では失われてしまった原住民族の言葉に関する貴重な情報などが多く含まれており、これからの原住民族文化の復興への活用に大きな期待が寄せられていることがわかりました。

こうした日台共同での研究成果の一つの到達点として、2026年6月23日から翌年3月1日にかけて、国立台湾史前文化博物館の主催により、台南市の南科考古館で、特別展「断と続：鳥居龍蔵と現代台湾原住民族との対話」が開催されます。この展示は、当館も協力機関の一つであり、鳥居龍蔵の台湾フィールドノートも展示されています。もし台湾にお越しの際は、ご覧いただければと思います。

（小林篤正）

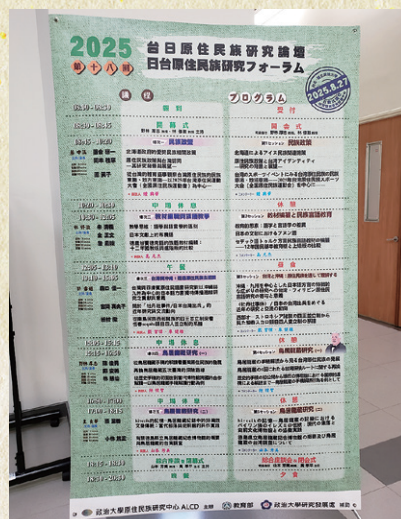


図1 会場入口に立てられたプログラム



図2 日台原住民族研究フォーラムの集合写真



図3 報告中の風景

台湾北部・東部での学術調査

筆者を含む当館職員は、2026年1月15日から20日まで台湾へ赴き、鳥居龍蔵が1910年の年末から翌年2月にかけて行った第5回調査の足跡をたどる調査を行いました（図1）。ここではその調査の様子を紹介します。

まず鳥居が第5回調査で訪れた台湾北部の台北市・桃園市から宜蘭県へ向かいました。鳥居の第5回調査は、台湾北部の山間部に居住していた先住民族であるタイヤル族を対象としたものです。そこで今回の調査では、鳥居がタイヤル族の村を訪れた際に通過したとされるルートの踏査を行うとともに、現在のタイヤル族の村において聞き取り調査を実施しました。鳥居の調査ルートの踏査では、桃園市復興区から宜蘭県にかけて、実際に鳥居が通ったと考えられる山道をたどり、鳥居の調査記録には移動の様子があまり記されていませんが、今回の調査によって、彼がかなり険

しい山中を移動していたことが分かりました。また、道中には複数の日本統治時代の遺構が残されており、鳥居が目にしたであろう光景をうかがうことができました（図2）。

さらに今回は、台湾東部の花蓮県にも向かい旧吉野村（現在の花蓮県吉安郷）で調査を行いました。旧吉野村は、日本統治時代に多くの徳島県人が移住した村であり、現在でも当時の寺社や石造物の一部が残されています。特に、旧吉野村に開設された真言宗の布教所を前身とする寺院である慶修院では、1923年に建てられた本堂や、日本統治時代に設けられた四国八十八カ所の写し霊場（四国八十八カ所のミニチュア版）の現状を確認することができました（図3）。

今回、台湾を訪問したことで、鳥居の調査の実態や、台湾と徳島の深いつながりに触れることができました。引き続き、鳥居の台湾調査に関する実態解明と、台湾との交流を進めていきたいと思います。（矢野大輔）



図1 鳥居龍蔵の第5回台湾調査のルート



図2 日本統治時代の石段

桃園市復興区から宜蘭県にかけての山中には、日本統治時代に台湾総督府が設けた石段が残されています。鳥居はこうしたルートを通して移動していたと考えられます。



図3 慶修院の本堂

本堂の中には、棟札などの文化財が残されていました。

鳥居龍蔵記念博物館の 展 示 ・ 普 及 行 事 について

2026年度の夏期までに実施した主な行事と、今後の予定をお知らせします。

* 令和8年度 鳥居龍蔵セミナー

🌀 文化の森こどもの日フェスティバル (5月5日)



当館の学芸員らが取り組んでいる研究テーマについて、わかりやすく解説する連続講座です。写真は、第1回「鳥居龍蔵の恩師 坪井正五郎」(5月17日)の様子です。



鳥居龍蔵の活動にちなんだイベントとして「手作りカメラで写そう」を行いました。参加者と一緒に簡単な仕組みのカメラを作り、写真を撮影しました。

📌 今後の予定

- 文化の森サマーフェスティバル 8月11日(火・祝)
- 文化の森秋祭り 11月3日(火・祝)
- 鳥居龍蔵セミナー 第4回 9月13日(日)、第5回 1月31日(日)
- 文化の森ウィンターフェスティバル 2月11日(木・祝)
- 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム 2月13日(土)
- 鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム 2月14日(日)
- 鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう 3月21日(日・祝)

※企画展および関連行事については、2～3ページをご覧ください。



鳥居龍蔵 (1870 - 1953)

1870(明治3)年に、現在の徳島市で生まれた人類学・民族学・考古学の研究者。日本国内のほか、台湾、中国西南部、中国東北部、朝鮮半島、シベリア、サハリン、千島列島などで、民族調査や遺跡の発掘調査を行い、その成果を多くの著作にまとめた。主な業績は『鳥居龍蔵全集』全13巻に収録されている。

鳥居龍蔵記念博物館 NEWSLETTER No.10

発行年月日 2026年7月31日

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山(文化の森総合公園内)

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp>